

# 大衆文芸問答

国枝史郎

青空文庫



問「大衆文芸と純文芸、どこに相違点があるのでしょうか？」答「純文芸は叱る文芸、大衆文芸は叱らない文芸。ざつとこんなように別れましょうかね」問「変な云い廻わしじやありませんか」答「ちつとも変じやありませんよ。ひとつ簡単に説明しましょう。純文芸の作家連は、こう世間様へ申します。『俺の作は可よい作だ。お前達よ、読まなければならぬ。読まない奴はヤクザ者だ』そういう態度で書かれた物が、世に謂いう所の純文芸です。これに反して大衆作家は、世間の要求に応じます。つまり世間の人達の方から、大衆作家に云いかけるのです。『ねえ大衆作家君、僕等の読よみたいのは斯こういう物です。こういう物を作つて下さい』『はいはい宜よろ敷うございますとも、そういう物を作りましょう』さて其処で作ります。そういう態度で作られたものが、世に謂う所の大衆文芸です」問「どうもハッキリしませんね」答「では語を変えて云いましょう。世間の嗜好を顧慮せずに、書いた物が純文芸で、その反対が大衆文芸です」問「そうは云つても、純文芸の中にも、世間の嗜好を顧慮したものが、随分あるようじやありませんか」答「それは勿論ありますよ。要するに程度の問題です」問「世間の嗜好に投じてばかりいるのは、よい事ではありませんまい」答「まず嗜好に投ずるのです。それから作者の思う所を、ジワジワと世間へ

伝えるのです。——面白可笑しく読ませ乍ら、思う所を伝えるのです」問「純文芸よりも大衆文芸の方が、読者の数は多いでしょうか？」答「ええ何うやら多いようですね。純文芸はルビ無し文芸、大衆文芸はルビ附文芸、これで解るじゃありませんか」問「また変なことを云い出しましたね」答「ちつとも変じゃありませんよ。ルビが無いということ、は、ルビが無くても文章の読める、教養のある人達を、相手にしているということになり、ルビが有るといふことは、仮名しか読めない人達をも、相手にしているということになります。そうして世間を見渡した所、どうも仮名しか読めないような、そういう人達が沢山あります」

問「大衆文芸というものは、一体何時頃から始まったんでしよう？」答「それでは貴郎へ反問します。純文芸というものは、一体何時頃から始まったんでしよう？」問「ははあ夫れでは貴郎としては、そういう問題を研究するのは、無駄であり不可能だといふのですね」答「まず其辺におちつきましようかね」

問「大衆文芸というものは、何時頃から盛んになったんでしよう？」答「是もハッキリとは云えませんね。だが思う所を云ってみましよう。博文館から講談雑誌が出、講談社から講談倶楽部が出た、その頃からじゃないでしょうか」問「しかし其頃は二雑誌共、講談

師や落語家の口演速記を、主として載せていたようですよ」答「それは将しくお説通りで  
 す。ところが夫れ等の口演物が、筋としては千篇一律、材料から云えば少なかつたので、  
 その不足を補うため、大衆文芸家の作物を、掲載するようになったんですね。——だが勿  
 論その頃には、大衆文芸だの大衆文芸家だの、そういう言葉はありませんでした」問「私  
 の記憶に誤あやまりが無ければ、大衆文芸は震災後に、非常に盛んになったようですね」答「私も  
 そんなように思つて居ります」問「これは何ういう訳でしょう？」答「説明するには及び  
 ますまい。震災で人心が険しくなり、浮世が暮らし悪くなつたので、其処で慰めて貰おう  
 として、雑誌や書物を読んだんですね。すると今も申しました通り、純文芸の作家達は、  
 叱つてばかり居るでしょう。そこで人々は怯おびえて了しまい、あんまり叱らない大衆文芸家の、  
 作物へ食い付いて行つたんです。それを見て取つた大衆文芸家は、宜敷いというので肌を  
 抜き——鉢巻ぐらいはしたでしょう、続々名作を出したんですよ。そこで盛んになつたん  
 ですよ。つまり需要と供給とが、程よく釣合が取れたんです」問「去年は随分純文壇の人  
 が、大衆文芸を取り上げて、議論したようじゃありませんか」答「それに対して大衆文芸  
 家は、殆ど答ほとんえようとはしませんでしたね」問「全くあいつは不思議でした。どう解釈す  
 べきでしょう？」答「答えることが無かつたのか、答えることを欲しなかつたのか、まあ

此二つに帰着しましょう」問「もし前者なら不合理であり、もし後者なら利口すぎますね」  
答「そうです前者なら不合理です。自分のやっている仕事に就いては、各自意見がある筈  
ですからね。そうは云つても大衆文芸家の中には、そういう不合理の心境に於て、書いて  
いた人もあつたようです。だが公平にも然ういう人の作は、世間の人に受けて居りません。  
そうして幸にも然ういう人は、少いようでございますよ。さて後者なら利口すぎるという、  
この言葉も中つています。つまり貴郎の云おうとする処は、作家が評論を兼ねるといふこ  
とは、往々失敗を招くので、それで避けたといふのでしよう？」問「まあ然う云つた所で  
す」答「もう一つ突つ込んで云いますと、作家が何等か説を建て、それが不幸にも間違つ  
ていたり、或はひどく古かつたり、乃至は他人に反感を持たれたり、そんなようなことが  
あつた場合、早速作家は裏を見られ、鼎の軽重を問われるので、苦痛であり損だといふ処  
から、障らぬ神に崇無し、このイキキで説を建てなかつたんだと、屹度こんなように有  
仰り度いのでしよう」問「それに相違ありません」答「私も夫れに賛成します。しかし  
私にはもう一つ、別の思惑があるのです。それは他でもありません。大方の作家というも  
のは、断片的には物は云つても、系統立てて物を云うことは、大變下手だといふことなの  
です。そこで皆さんがやらなかつたのです、ええと、夫れから最う一つあります。お互同

士何んとなく、遠慮し合ったということです。ええと夫れから最う一つあります。創作の需要が非常に多く、論じる暇が無かったのです」

問「純文芸家の人達が、大衆文芸を論じ出したのは、一体何ういう理由でしょう？」答「大衆文芸が隆盛になり、一つの社会的現象として、無視することが出来なくなったので、それで止むを得ず不本意乍ら、取り上げて論じたというものです」問「不本意ながらと仰有るのは？」答「大衆文芸というものは、あらゆる階級へ行き渡り、多くの賛成者を持つていましたが、或る一団の人達ばかりが、つい最近まで非常に頑固に、これを軽蔑し無視していました。それは他ならぬ純文芸家です。下等だ、非芸術的だ、嘘っパチだ。こんなものは一切認めない。こう非常に威張つてね。だが其中今も云つた通り可成り隆盛になつたので、『うつちやつて置くことも出来ないだろう、不本意ながら論じてやろうぜ』即ち恩惠的態度を以て、これを論じたというものです。だからご覧なさい今日に於ても、純文芸家の大部分は、何かと叱つてばかり居りますから。だが勿論或人達は、熱意を以て賛成し、且つ是を鼓舞してくれました。菊池寛さん、平林初之輔さん、藤井真澄さん、加藤武雄さん、堀木克三さん、橋爪健さん、尚此他にもありました、手許に参考書がありませんので、心覚えだけを記して置きましょう」問「芥川さんが文芸時報で『大衆文芸という

ものは、寧ろ思想を織り込み易い、そういう型の文芸だのに、どうして思想を織り込まないのだろう』こう質問して居りましたが、これに就いてご感想は？」答「けだし是は名言です。まさしく大衆文芸は、純文芸と比較して、却って思想を織り込み易い、そういう型を持つて居ります」問「簡単に説明を願ひ度いもので」答「純文芸というものは、非常に極端に神経質に、完璧ということを必要とします。ですから思想を織り込むにしても、完璧性を傷付けないように、織り込まなければならないのです、然るに一方大衆文芸は、勿論完璧は望ましいのですが、純文芸のそれのように、そう極端に神経質に、完璧ということを必要としません。尤も夫れだから純文芸家達から、長い間外道視されたんですがね。で、そんなように大衆文芸は、完璧性の方面では、今日大いに得をして居ります。即ち思想を露骨に織り込み、完璧性を傷付けた所で、叱られないというわけです。ですから大衆文芸は、寧ろ思想を織り込み易い、そういう型の文芸ですよ」問「それにもかかわらず大衆文芸は、思想を織り込んでいないのですか？」答「これも遺憾乍ら芥川さんの説に、従わなければならぬのです。尤も例外もございません。中里介山さんや白柳秀湖さん、それから時々テイマ小説のような、そういう作をする土師清二さんも、その一人として数えられましょう」問「だが併し他の作家も、思想は織り込んでいるのですが、旨く人情でボカ



しているの、目立たないのではないでしょうか？」答「これは有りがちな強弁です。いかに人情でボカしても、いかに技巧で眩くらましても、思想を織り込んだ文芸なら、それが滲んで出る筈です」問「なまじ思想を織り込むと、世間様は厭いやがりはしませんか？」

答「それは先刻も云いました通り、世間の人の嗜好を顧慮し、叱らずにジワジワと織り込んだら、まさか厭とは云いますまい」問「所で思想を織り込むとして、どんな思想を織り込むべきでしょう？」答「これは一見愚問のようで、案外愚問じゃありません。……各作家の各自の思想、これを織り込むには相違ありませんが、さて其思想が現代離れのした——秋田雨雀さんの云い廻まわし方をもじれば——『昨日の思想』や『一昨日の思想』では、大いに困るということになります。けつきよく『今日の思想』なるものを、織り込まなければならぬのです」問「今日の思想、と有仰ると？」答「それは読んで字の如しです。今日の思想！——とこう云つただけで、その内容が解らないような人には、今日の思想を説明した処で、けつきよく矢張やはり解らないでしょうよ」問「では解つたとして置いて、その『今日の思想』なるものは、大衆文芸のみならず、純文芸へも織り込むべきでしょう？」答「それは云うまでもありません。だが併し大衆文芸へは、特に織り込まなければならぬのです」問「それはどうしたわけでしょう？」答「大きな声では云われませんが、迂闊うっか

り大きな声で云つて、純文芸家達に知れようものなら、一喝を喰うのは見たようなものです。だから小声で云いますがね、どうも今日の純文芸は、書齋芸術の境地にあり、大衆文芸は夫れに反し、辻文芸の域にあります、で、書齋へ通るものは、勿論例外はありません。うが、大方は教養ある紳士淑女です。ですから間違つて『昨日の思想』や『一昨日の思想』を伝えた所でその人達は取捨選択します。ですから比較的安全です。辻の方は然うは不可いません。教養の無い連中の方が、一層多く通ります。で然う云う人達へ『昨日の思想』を伝えると、選択をせずに信じてしまいます。ですから辻芸術たる大衆文芸は、特にしつかりと『今日の思想』を、織り込んで置かなければなりませんね」問「織り込んでいる人があ  
るでしょうか？」答「ええ数人はありますよ」

問「去年からかけて今年迄までに、どういふ大衆文芸家が、活躍したか教えて下さい」答  
「堀木克三さんがサンデー毎日で、五名ほど上げて居りました。その中四名だけ記しまし  
よう。中里介山、白井喬二、長谷川伸、土師清二、これらの人でございますね」問「勿論  
この他にもあるのでしょうか？」答「あるともあるとも大有りです。あんまりあるので上  
げ切れないのです。特に大仏次郎さんなどは、働いた部に属しましょう。直木さんだつて  
抜かせませんね。——だが以上は大衆文芸の中、鬻物に関して述べたのですよ。これ以外

にも現代物があります。しかし今日大衆文芸と云えば、大方齧物を指すようです。大衆現代軽快物の方では、森曉紅さん寺尾幸夫さんが、よい物を見せられました」問「大衆文芸の功労者は？」答「よく働いて佳い作を見せた、数多くの大衆文芸家と、大衆文芸を論議してくれた、数多くの純文芸家と、大衆文芸を鼓舞してくれた、大衆文芸物の雑誌編集者です。特に生田蝶介さんは、よい作家を産んでくれましたね。同氏今や博文館を去る。しかし此人は大衆文芸家として、打つて出るだろうと思われれます」

問「純文芸の作家連も、大衆文芸へ手を染めましたね」答「叱り乍らも手を染めました」問「これに関してのご感想は？」答「大して感想もありません。だが一言申しませう。

純文芸壇は鎖国主義で、大衆文芸壇は開港主義だとね」問「防ぐだけの実力が無かったの  
で、止むを得ず開港したんでしょう」答「そういう見方も一理あります。しかし夫れより  
重大なることは、明治初年の日本人達が、西洋人を迷信したように、大衆文芸家その人達  
や、大衆物雑誌の編集者達が、純文芸家の人々を、迷信したのが原因です」問「菊池寛さ  
んが斯う云つて居ります。『或る天分を持った者が、大衆文芸家として成功し、或る天分  
を持った者が、純文芸家として成功した』と」答「私にもそんなように思われます。しか  
し大多分の純文芸家は、それとは反対に云つていますね。『純文壇へ来た所で、ウダツの

上らない連中が、大衆文芸の畑へ行き、漸くウダツが上ったんだ』とね」問「それは勿論偏見でしょうね？」答「いまだに象牙の塔に住み、唯我独尊主義を奉じている、偉い人達のご託宣でしょう」

問「此処で問題を変えましょう、探偵小説が流行つて来ましたね。探偵小説時代というこんな言葉さえ云われて居りますが、これは信じてよいでしょうか？」答「可成り信じて可いようです」問「可なりというのは何ういう意味です！」答「日本の純粹探偵創作壇、これを標準にして云う時は、多少割引が必要でしょう。作家の数から云う時も、作品の量から云う時も、亦その質から云う時も、全盛時代とは云えません。但し探偵創作物が、日本の読書界に現われてから、僅々数年にしかありません。これを考慮に入れて云えば、可成り全盛になつたなあと、感嘆しても可さそうです。だが立場を代えて云えば、探偵小説時代という、この掛声は是認出来ます」問「それを聞かせて戴きましょう」答「多くの大衆文芸の中へ、探偵質が織り込まれている。この点から云えば全盛です」問「個々の作家の特徴に就いて、御意見を聞こうじゃありませんか」答「それはいつぞや読売新聞で、一通り云つたつもりです。そうして其後の作家評と、そうして其後の作品評とは、平林初之輔さんが新青年誌上で充分云つて居るようです」問「そうして貴郎は其説に、全部賛成

しているのですか」答「それより私は斯う云い度いのです、平林さんがああ云つて以来、私の云うことが無くなつたんだとね」問「それは大変お気の毒ですね」答「いや、ひどく可い気持です」問「純文芸の作家達が、探偵小説へ手をつけましたね」答「大衆齣物へ手を付けたようにね」問「その出来栄えは如何いかです？」答「それは甲賀三郎さんが、これも読売新聞で、既に批評をしています」問「それに貴郎は賛成ですか？」答「そうですね、私は賛成です」問「現代日本の探偵小説壇を、一口に云つたら何う云えましょう？」答「叱る人があるかも知れませんが、私はこんなように云い度いのです。『西洋探偵小説の、翻訳時代から一歩進み、創作時代へ這入はいつたんだ』とね」問「翻訳にしろ創作にしろ、兎も角とかくも今日探偵小説は、流行していると思われませんが、その原因は何んでしよう？」答「私は探偵小説をも、大衆文芸の其中へ敢あえて加えて居るものです。そうして私は前段に於て、大衆文芸の隆盛になつた理由を、説明して置いたつもりですよ」

問「それは解つて居りますが、併し探偵小説という、特殊の名称のある物を、特に手中に取上げて、流行の原因を探るのも、不可能のことでは無さそうですね」答「それは勿論可能です。では簡単に云いましょう。ひどく平凡なことですがね。探偵小説というものは、秘密と秘密の曝露とを、取り扱つた文芸です。ところで人間というものは、その二つを好

みます。ですから探偵小説が、多くの人に愛読され、流行を来きたしたと云いたいのです」問  
「しかし最近めつきりと、流行はやり出したのは何故でしょう？」答「その事に就いても最う  
私は、読売新聞や其他の雑誌で、断片的に云った筈です。しかし最う一度繰り返しましよ  
う。『探偵小説新趣味』や『新青年』や『秘密探偵雑誌』これらの雑誌が震災前から、西  
洋探偵小説の、移植を計ったのが原因の一つ、その中新青年の編集者たる、森下雨村さん  
と小酒井不木さんが、優秀なる探偵小説家達を、日本人の中から選び出し、それを世間  
に紹介し、そうして夫れらの小説家達が、大方の期待に背むかないような、相当の佳作を  
発表したのが、探偵小説創作熱を、高める原因になったようです。最近に至って春陽堂が、  
此方面に力を尽くし、一層勢を高めました。見遁みのがすことの出来ないのは『探偵趣味の会』  
の事業です。最近に出来た会ですが、有益な仕事をやって居ります。孤塁奮闘松本泰さん  
が、女房役の中野圭介さんと、『探偵文芸』を発刊し、斯界に貢献しているのも、決して  
見遁してはなりませんね」問「優秀なる日本の探偵小説家には、どんな人達がいるのでし  
ょう？」答「春陽堂から発行された『創作探偵小説選集』これへ盛られた人達を、先まず数  
えてもいいでしょう。尚この他純文壇の人で、数も多く質にも優れた、探偵小説を作つて  
居る人に、片岡鉄兵さんがいるようです」

問「最近に現われた斯界の名著は？」答「江戸川乱歩さんの『屋根裏の散歩者』これはまさしく好い本です」問「探偵小説の其中へも、思想を織り込むか否かに就いて、一部で論じられているようですね」答「論じる必要も無い程に、明瞭な問題にもかかわらず、矢張り論じられているようですね」織り込んだ方がいいと云うことも、織り込む可き思想とはどんな思想か？ どういう手段で織り込む可きか？ これに就いては前段に於て、既に説明をして置きました。それをそっくり探偵小説へも、宛て箴む可きだと思えますよ」問「織り込んでいる人があるでしょうか？」答「大衆文芸齣物に於て、思想を織り込んでいる人が、可成り少数であるように、探偵小説の方面でも、織り込んでいる人は少いようです。そのみならず数人の人は、思想質なんか織り込んではいけません。こう云つて力んでいられるんですよ」問「本格物と変格物、この議論もありましたね」答「私の記憶に誤あやまりがなければ、たしかこの言葉は甲賀さんが、云い出したもののように思われますね。こういうような範疇をつくり、物を論ずるといふことは、便利という点で結構です」問「どつちの方が可いのです」答「これは問題になりませんなあ。若槻宰相が云つて居ります、エエものはエエとして、ワリエものはワリエとして、是は全く名言です。で私も云いましょう。本格物だつてエエものはエエ、本格物だつてワリエものはワリエ、変格物だつてエエもの

はエエ、変格物だつてワリエものはワリエ」問「貴郎の好きな作家と作品は？」答「云えないことありませんが、併し是は遠慮しましょう。私が好きだと云つた所で、その人とその人の作品が、価値を高めるものでは無し、結果は反対かもしれないからね。それに第一『私が』だの、乃至は『俺が』だのをブラ下げると、ひどく垢抜けないことになり、田舎者が愈々田舎者になります。まあご覧なさい大トルストイだつて、あんまり『俺が』を鼻の先へ出すと、ちつとも『俺が』を鼻の先へ出さない、大ドストイエフスキイの人や作へ、親しみを感じるじゃありませんか。……だが一つだけ上げて置きましょう。牧逸馬さんが新青年へ載せた『短篇集』は愉快なものでした」問「大衆文芸問答も、まず此辺で切り上げましょうかね」答「思うことの十分の一、いや思うことの百分の一も、云われなかつたのは残念ですが、どうも致し方がありません。そうして私は思うのです。こんな鳥瞰的の記事に対しても、吃度叱る人がありますとね。どうしてあの作を問題にしなかつた、どうしてあの人をオミットしたかつてね」問「答えない方がいいでしょう」答「ところが然ういう連中に限つて、腕ツ節が強く執拗でね。こいつにあ全く降参します」問「それは夫れとして、めめましようかね。では、鳥渡ちよつとお手を拝借」答「さあさあ夫れではめめましよう」御兩人「シャンシャンシャンシャンシャン……さあ、お開きにな



りました」



# 青空文庫情報

底本：「国枝史郎探偵小説全集 全一卷」作品社

2005（平成17）年9月15日第1刷発行

底本の親本：「新小説」

1926（大正15）年4月

初出：「新小説」

1926（大正15）年4月

入力：門田裕志

校正：hitsuji

2019年7月30日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 大衆文芸問答

国枝史郎

2020年 7月18日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>